

# 保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の開発 —造形活動を通じた幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から—

矢野 真  
(児童学科准教授)

田爪 宏二  
(京都教育大学教育学部准教授)

吉津 晶子  
(熊本学園大学准教授)

本研究は、保育者養成におけるクロス・トレーニング・プログラムで行った「地域の材料を使ったペンダントおよび壁面制作」の実践的教材を通して、学生にとってどのように「学び」の深まりへとつながっているか、その有効性について明らかにすることを目的とした。クロス・トレーニング・プログラムに参加した10名の学生の実習記録にみられる活動の記録や考察について、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材としての有効性という観点から分析した結果、学生は造形活動という題材を通して、幼児や高齢者のもつスキルの特性や活動に対する意欲などの心理状況に対しての理解が促された様子がみられ、また幼児—高齢者間の世代間交流の姿についても、造形活動に含まれる共同作業という形態を中心として捉えることができる様子がみられた。このように、本研究での実践的教材は、学生にとって幼児、高齢者および世代間交流の実際について理解するうえで一定の効果を持っており、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材として有効である可能性が示唆された。

Keyword：実践的教材，保育者養成，交流，教材開発，クロス・トレーニング・プログラム

## 1. はじめに

本研究は、保育者養成におけるクロス・トレーニング・プログラムにおいて行われた造形活動の事例について、その有効性を検討するものである。これまで、筆者らは「型取り制作」(2012)、「モバイル制作」(2013)について、その学びの効果に関する検証として、学生の活動に対する行動観察と実習記録における自由記述の質的な分析を通して、以下の点を導出した。

造形活動を中心とした本プログラムにおける各段階の活動を通して、「造形（表現）技術」、「子どもへの援助技術」、「高齢者への援助技術」、「子ども—高齢者間のかかわりに対する援助技術」において、それぞれの場面に即した学生の学びがみられ、実践的な保育技術の向上が窺われた。特に、表現活動への援助や造形を通じた保育者としての専門的なかかわりについて、高齢者への援助技術の獲得が子どもに対するそれ

以上に促されたことが窺われた。この結果について、高齢者とのかかわりはこれまでの乳幼児への援助を中心とした実習経験の中では体験できなかったことであり、学生にとっては新たな学びにつながり、援助技術の獲得の実感に繋がった。これらは、「具体的な造形技術を学び、技能を習得する」、「子どもと高齢者、それぞれへの支援のあり方について考える」という本プログラムの目的に沿った成果が得られた（矢野・田爪・吉津，2013，2014）。

## 2. クロス・トレーニング・プログラム

本研究では、上述の実践および考察を踏まえ、引き続き造形活動を取り入れたクロス・トレーニング・プログラムの実践事例を取り上げる。

クロス・トレーニング・プログラムは、多湖（2010）の実践にみられる高齢者のケアを担当する介護職と子どものケアを担当する保育職と

の「職種間相互の体験的入れ替えを通したトレーニング」と位置付けられている。保育者養成においてもこのような人材育成のあり方が必要であると考え、Rosebrook & Larkin (2003)の世代間交流プログラムスタッフの評価ガイドラインを参考とし、保育者養成のために仮デザインを行ったものであり、「地域の中における保育所の役割と、保育者のあり方を学ぶ場」、「子どもと高齢者に実際にかかわり、両者の理解とともに両者のかかわりを豊かにする技を学ぶ実習」という設定で実践された(吉津・溝邊・田爪, 2012)。

### 3. 本研究の目的

本研究で取り上げるクロス・トレーニング・プログラムは、K学園大学において、7月に事前学習、9月に自主実習という形で実践を行い、10～11月に事後指導を行うという全体像をもったプログラムである。なお、このプログラムの主な目的は、世代間交流への支援を通して「対象者(幼児、高齢者)の理解」、「世代間(幼児－高齢者)の交流」、「保育者としてのかかわり」の実際について体験的に学習することである。

本研究では、これまでの実践の成果を踏まえ、世代間の交流を意識しながら、実践的教材としての造形活動の開発に関わる実践を深めていく必要があると捉えた。特に、世代間交流アクティビティの一環として、地域の材料を活かすことを大切な事項とした。

そこで、人と人とのコミュニケーションや地域の材料を活かした「交流」をテーマとした造形活動を取り上げ、学生の学びについて造形の視点から検討を行うことを目的とした。

なお、本研究における実践には、クロス・トレーニング・プログラムに参加する学生以外に、京都・K女子大学の5名がボランティアスタッフとして参加した。そのため、幼児・高齢者(沖縄)、そして学生(熊本・京都)の、地域に関わる材料を使用し、活動にそれぞれの地域の題材を取り入れることで、世代間交流だけでなく幼児・高齢者と学生との交流をも促すことが

できる内容とした。

## 4. 事前学習について

### 4-1. 事前学習の目標

本プログラムにおける造形活動は、世代間交流アクティビティの一環として位置付けられているため、造形活動の事前学習における具体的な目標と内容については、以下の通りとした。

- ①子どもと高齢者をつなぐ造形活動プログラムのための準備を行う。
- ②具体的な造形技術を学ぶ。
- ③子どもと高齢者、それぞれへの支援のあり方について考える。

### 4-2. 事前学習の内容と日程

造形活動のテーマを設定するにあたり、実践的教材としての「人とのかかわりや交流」、「自然素材のもつよさ」を大切な事項とした。そこで、「木育」により実践・検証されているペンダント制作(矢野・田爪・松井, 2014)を事前学習に取り入れた。

実施は、平成26年7月12日(土)の10:00～13:00、K学園大学校舎にて実施した。

### 4-3. 調査の対象

調査対象は、K大学社会福祉学部の保育者養成課程に所属する4年次生10名で、本プログラム参加までに、保育士養成カリキュラムの保育実習IおよびII、教育実習IおよびIIを修了している。

この対象は、造形活動についても同様とした。

### 4-4. 事前学習における教材の検討

本研究において、地域材料を使う意味を考え、沖縄の木であるユシギを使うことにより、学生たちは触覚を活かしたペンダントの具体的な制作方法について学んだ。教材研究として、まずは学生一人ひとりが体験を通じて必要な技能を身につけることを大切な事項とし、この木を用いてどのように子どもと高齢者をつなぐ造形活動にしていくか、どのように支援をしていくか結び付けていくかを考えるように導入を行った。

実践後、テーマである「交流」を踏まえ、後半の造形活動プログラムを学生たち全員での組み立てを行い、テーマや材料、交流の方法、制作過程についての確認や、材料の収集と準備を行った。

その結果、造形技術が難しくないように配慮し、さまざまな材料を貼り合わせる「壁面制作」を行うことが決定した。

## 5. 造形活動について

### 5-1. 実践1 交流を深めるための「ペンダント制作」

造形活動では、『地域の材料を使ったペンダントおよび壁面制作』として、国頭村の子ども・高齢者と実践を行う学生が、地域の自然を活かした木や貝殻などを使い制作を行うこととした。

実施は、平成26年9月4日（木）の10:30~12:00を「ペンダント制作」(実践1)、13:30~16:00を「壁面制作」(実践2)とし、楚洲あさひの丘にて行われた。

実践の前半は、子どもと高齢者、および子ども・高齢者と学生たちとの交流を深めるため、ペンダント制作を行った。地元のユシギと貝殻を使い、学生が子どもと高齢者に制作の方法を伝えた。

制作は、①紙やすりを使って触感を味わいながら、ユシギを研いてツルツルにする ②貝殻を選び、ホットメルト接着剤を使ってユシギに

貼る(図1) ③ユシギに穴を開け、ビーズとひもでペンダントにする という手順で行った。

制作においては、幼児及び高齢者に「誰のために、どんな願いを込めてつくるか」を考えながら行うことを教示し、その内容については交流を通じて確認を行った。学生たちの提案により、つくる相手が見つからない場合は、学生たちとお互いに交換することにより、コミュニケーションを図るといった配慮もみられた(図2)。はじめのうちは、数名の高齢者が造形活動は難しいという理由をつけて拒否をしている姿がみられたが、制作工程が単純であったため、次第に笑顔で楽しむ姿がみられた。



図2 ペンダント制作を通じた交流の場面

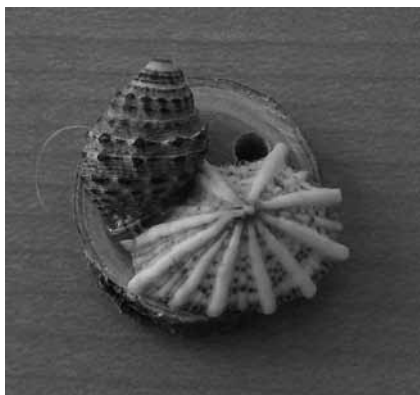


図1 ユシギの木に自ら選んだ貝殻を貼り付ける

### 5-2. 実践2 地域材料を使った「壁面制作」

実践の後半は、子どもと高齢者、また学生たちとの更なる交流を深めるために、壁面制作を行った。

市販のコルクマット(30×30cm)を9つ繋ぎ合せ90cm角の土台をつくり、学生たちがあらかじめ黒の油性マーカーで下絵を描いておいたものに、貝殻や木端など、沖縄や熊本などで採れた自然物などを貼り合わせて壁面作品を完成させる工程を計画した。しかし、学生たちは自ら時間配分や高齢者および子どもたちの技術的側



図3 高齢者や子どもへの声かけに配慮する学生

面などを配慮し、制作開始直前に水彩絵の具を使って下絵に色をつけることとした。実際に制作が始まると、自然物などを貼り合わせる時に同じ色を合わせることで、制作がスムーズに行われているようであった。

また、学生たちは高齢者や子どもへの声かけに配慮しながら（図3）、さまざまな材料を組み合わせ、かたちをつくることで、材料が持つ感触を楽しみながら作品として組み合わせている様子もみられた。全体的に高齢者が制作に対する困難さを感じている様子はみられなかった。

完成した作品（図4）は、学生たち全員で協力しながら、施設の正面玄関へ設置した。



図4 完成作品

## 6. 結果と考察

本研究で実践した造形活動について、学生の実習記録の分析を行い、学生の学びの内容について検討する。具体的な分析の視点としては、学生が子どもと高齢者をつなぐ造形活動プログラムの目的に対してどのように取り組み、評価していたかについて、実習記録における活動記録およびそれに対する考察の記述を文単位で区分し、造形活動に関わる内容を抽出したのち、次の3つのカテゴリーに分類した。すなわち、実習の目的に対応させ、「対象者（幼児、高齢者）の理解」、「世代間（幼児—高齢者）の交流」、「保育者としてのかわり」である。

以下では、それぞれのカテゴリーにおける記述内容について、代表的なものを示し、その傾向について検討する。

### 6-1. 「対象者（幼児、高齢者）の理解」に関する記述

#### (1) 幼児の理解

##### ・活動の記録

(ペンダント制作)

- ① ヤスリでユシギを磨くことで表面が少しツルツルになることに驚いていて、Sちゃんはきれいになったと見せてくれました。
- ② 「つるつるしてる」と満足げになり、お気に入りの貝を選んですぐに完成した。

(壁面制作)

- ③ Uちゃんがビーズに興味を持ってなかなかビーズを離そうともしませんでした。
- ④ ボンドに触ってみると感触が面白かったみたいで、黒い部分は、T君のこだわりがたくさん詰まった作品になりました。

##### ・考察

(ペンダント制作)

- ⑤ 自分でやってみようとする気持ちが出て、できないと思うと自分のしてほしいことを相手に伝える能力が身についているなど感じました。
- ⑥ (幼児が) おじい(高齢者)のお手伝いをした時は「おじいのために作っている」と言っていたので、人のために作る楽しさを感じたのではないかと思います。

活動記録においては、幼児が素材の触感への興味を示している姿(①②)や、特定の素材へのこだわり(③④)がみられる。特に、前者については素材の特性を反映していると考えられ、この素材が幼児の興味を惹きつけるものであったことが窺われる。また、考察においては、幼児が自己主張する姿(⑤)や高齢者を思いやる気持ち(⑥)など、活動の中に見られる幼児の心的特徴に言及した記述がみられた。

## (2) 高齢者の理解

### ・活動の記録

(ペンダント制作)

- ① ツルツルになると、Rちゃんに対し「つるつるになったよ」と言ってみせ、次の作業に取り掛かる。
- ② 1人で制作の手が止まっている高齢者がいた。「一緒にしましょう」と声をかけるが、なかなか手が動かない。

(壁面制作)

- ③ ビーズをきれいに敷き詰める方や、千代紙をきれいに貼っていく方がいた。
- ④ Tさんは片手が不自由なので片方の手だけで新聞紙を丸めます。手のひらで丸めながらテーブルに押し付けて硬くしています。
- ⑤ ボンドなど触りたくないと言うことで、見るだけになってしまいました。

### ・考察

(ペンダント制作)

- ⑥ 制作に対してとても積極的で、早く完成させたいと思いつつも、しっかりと納得のいくまで制作をし、完成させていました。早くするだけでなく、その作品の内容、質にもこだわられているのだと思いました。
- ⑦ 「ここにいた子は？」と話されたり、自分からその子に関わろうとされていて、驚きました。

(壁面制作)

- ⑧ 高齢者の方々もやっぱり子どもを見るだけで笑顔になられていて、最後にはとても良いものができたのでよかったです。

活動記録においては、ペンダント制作で先に述べた素材に対する幼児の興味に共感する様子

がみられている(①)。また、壁面制作では高齢者のスキルに注目した記述がみられている(③④)。そこにおいては、活動に取り組む姿から高齢者の持つスキルについての理解がなされていることが窺われる。他方で、活動に対して消極的な高齢者の姿も記述されており(②⑤)、高齢者に対して活動を促すことの難しさを感じている様子が窺われる。

考察においては、高齢者が制作活動や幼児に対して積極的にかかわっている姿を捉えたものが多く(⑥⑦)、高齢者の自発的な活動に関する考察がみられている。さらには、幼児と関わることによる高齢者の変化を捉えた記述(⑧)もみられた。

## 6-2. 「世代間(幼児—高齢者)の交流」に関する記述

### ・活動の記録

(ペンダント制作)

- ① Aさんがストローを通すことに少し戸惑っていると、(幼児が)ひもとストローを持って、通す作業を手伝っていた。1つ通すと、ひもをAさんに持たせ、上からストローを通してあげた。

(壁面制作)

- ② (高齢者が) Sちゃんが貼ったそうにしていると一つ一つ手渡して、「ここに貼っていいよ」「もう少し小さいのがないか」と迷っているSちゃんに差し出す。
- ③ (高齢者は) Kちゃんが小さくし過ぎたり、大きくし過ぎたりすると「もう少し小さく」とか「大き過ぎ」と言っています。ボンドを塗るときは自らボンドをつけて塗って貼ったり、貝殻をつけたりして大きい貝殻は子どもがつけるのを見ていました。

### ・考察

(ペンダント制作)

- ④ 高齢者の方のできること、できないことに子どもがしっかり気づいて支援できていたので、私たちの側からの働きかけもしやすかった。
- ⑤ 出来上がったものお互いに首にかけあうところまで子どもたちはしていたので、高齢者を思いながら行動している様子を見ることがで

きた。

(壁面制作)

- ⑥ 特に高齢者にとっては子どもたちと話したり、子どもたちに教えたりしながらの活動というのは特別楽しいものになったのではないのかと思いました。
- ⑦ この場面では、MさんがT君に提案するという交流を見ることができました。一緒に制作活動をすることで、交流が生まれ、普段よりも子どもと高齢者の距離が近いように感じることができました。今回は交流を目的に造形活動をしたので、子どもと高齢者を繋ぐきっかけ作りができたと思います。

幼児と高齢者との交流に関する記述においては、お互いが苦手な作業を助け合いながら、共同で制作を進めている様子が捉えられていた。そこにおいては、幼児は高齢者の活動を補助し(①)、また高齢者は幼児に言葉がけを行うことで活動を促している様子が窺われる(②③)。考察の記述もこれらの活動を反映したものが多く、共同作業の特徴について考察したもの(④)や、それがお互いの心的側面にも影響しているという記述もみられた(⑤⑥)。さらに、このような世代間の交流の促進における造形活動の意義について言及する記述もみられた(⑦)。

### 6-3. 「保育者としてのかかわり」に関する記述

・活動の記録

(ペンダント制作)

- ① (高齢者に)「子どもと一緒に作ろうと言ってあるのでもう一度作ってみませんか」と誘うと、また席に戻り、子どもと高齢者と実習生の3人でペンダント作りを再開した。
- ② (幼児は)紙やすりで磨くということが難しく、苦戦していましたが、「つるつるになるようにしてみよう」と言うと、一生懸命に磨いていて「つるつるになったよ!」教えてくれました。
- (壁面制作)
- ③ T君と高齢者2名と一緒に「くまモン」を作りました。

- ④ お年寄りの方々がばらばらに座っているので、その間に子どもたちと私たちが入る。

・考察

(ペンダント制作)

- ⑤ 3歳のUちゃんには少し難しい作業だったのかなと思いました。(中略)、説明方法という部分も考えて始めていくことが大切だと感じました。
- ⑥ ネックレス作りのときは、高齢者と子どもが向かい合って座る形になり、私たちがそれぞれ見て学生と子ども、学生と高齢者を1対1になってしまっていました。
- ⑦ 出来上がった後に間に入って声かけをすることで、見せ合いっこをして交流することができたのでよかったのですが、貝殻を選ぶときなどはお互い選んであげる形をとるなど工夫してみるとよかったなと感じました。

(壁面制作)

- ⑧ 子どもと高齢者の人数が多く、作品を完成させることで精一杯になっていたと感じます。作業は席が離れていてなかなか貼れない方もいらっしやだったので、もっと良い方法があったのでは…と反省しています。
- ⑨ 作業中心と子どもの補助につきっきりになってしまったので、なかなか交流をつなぐ役割を果たせませんでした。
- ⑩ 制作の説明もしながらだったので、ひとりずつに話すことが多くなってしまったように思います。
- ⑪ 活動をしているときは、お年寄りとの関係性をうまく取り持つことができたと思ってはいたけれど、実際は、そうではなく、私とお年寄りとの関係ができていただけだと思いました。立ち位置や、関わり過ぎない援助も大切だと思いました。

前項では高齢者と幼児との交流に関する記述であるが、ここではそれに対する「保育者としての」学生の支援の特徴についての記述を取り上げる。まず、高齢者が活動に消極的だったり(①)、幼児が活動に行き詰っている場合(②)に言葉がけを行うなど、高齢者と幼児それぞれに対する対応が多くみられている。また、特に共同作業を必要とする壁面制作においては、高齢者、幼児、実習生の三者で活動する姿が記述

されている(③④)。しかしながら、高齢者—幼児間の活動を促そうとする記述は少ない。

考察においては、他の項に比して活動に対する反省が多くみられている。そこでは、ペンダント制作、壁面制作とも、活動に対する援助の難しさとともに、学生自身が造形活動に集中する一方で、交流という目的が果たせていないという反省もみられ、活動計画にも改善の余地があると感じていることを窺わせる記述もみられる(⑤⑧)。また、活動の記録に表れているように、幼児や高齢者と個々に関わることはできているが、世代間の交流という視点での関わりができないことに対する反省がみられている(⑥⑨⑩)。幼児・高齢者・実習生の三者のかかわりは、世代間交流への支援として一定の成果として認識されている(⑦⑪)。但し、これらの記述の中では、活動の記録に見られなかった、実習生が引いた形での世代間交流への間接的な支援が難しいと感じていることが窺われる。

#### 6-4. 分析のまとめ

本研究における造形活動に関する学生の記述を、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材としての有効性という観点からまとめると、学生は造形活動という題材を通して、幼児や高齢者のもつスキルの特性や活動に対する意欲などの心理状況に対しての理解が促された様子が窺われる。また、幼児—高齢者間の世代間交流の姿についても、造形活動に含まれる共同作業という形態を中心として捉えることが出来ていると考えられる。このように、本研究で実践した造形活動は、学生にとって幼児、高齢者および世代間交流の実際について理解するうえで一定の効果を持っていたと考えられる。

以上のように、本研究で用いた教材は、「交流」をテーマとした実践的教材として有効であり、保育者養成に関わる実践的教材として新たな可能性がみられた。このような成果が得られた背景について、本研究における造形活動の特徴を踏まえると、以下の点が推察される。すなわち、まず、素材として使用したユシギの特性である。ユシギという地域の素材は特に高齢者

にはなじみ深いものであると考えられ、活動への興味を促すことに繋がったと考えられる。またユシギを加工したツルツルした触感では低年齢の幼児にも興味をひくものであり、活動への動機づけを高めたと思われる。次に、「型取り制作」や「モビール制作」で課題となった造形技術の難しさについての問題点を解消するために、難しい技術を必要としないペンダント制作や壁面制作という活動を取り入れたことが、幼児、高齢者ともに比較的取り組みやすい課題となった。そして、特に壁面制作においては共同作業が生まれやすい課題であったことが、交流を促すうえで有効であったと思われる。

さらに、壁面のテーマとして、沖縄(シーサー、首里城)、熊本(くまモン)、京都(舞子さん)という、幼児、高齢者、そして学生の地域に関わる題材を取り上げたことである。特に学生にとっては、自分の地域の題材を沖縄の幼児や高齢者に伝えることで、コミュニケーションを促すことができたと考えられる。

最後に、ペンダント制作において「誰のために、どんな願いを込めてつくるかを考えながら」制作を行うという設定を設けたことも、今回の造形活動を「交流」という目的に方向づけるうえで有効であったと考えられる。

ただし、造形活動を通じた世代間交流への支援については、幼児、高齢者いずれかのみへの支援や、学生も交えた三者による交流はある程度可能ではあったものの、学生が関わりながらも一歩引いて幼児—高齢者間の交流を促すという、いわば側方からの間接的な支援は難しいようであった。このような支援は人的環境としての保育者という点からも必要な支援技法と考えられるが、学生にとっては難しい技法であることが他の実践事例においても指摘されており(田爪・吉津・溝邊・矢野, 2014)、有効な支援の在り方については今後検討する必要がある。

## 引用・参考文献

- 多湖光宗編 (2006), 「幼老統合ケア」, 黎明書房
- Rosebrook V. & Larkin E. (2003), *Introducing Standards and Guidelines : A Rationale for Defining the Knowledge, Skills, and Dispositions of Intergenerational Practice*, *Journal of Intergenerational Relationships*, 1 (1), The Haworth Press, Inc., pp. 133-144.
- 吉津晶子・溝邊和成・田爪宏二 (2012), 保育者養成課程におけるクロス・トレーニングの試み —幼老統合施設における実習と参加学生の意識調査—, 日本世代間交流学会誌, Vol. 2, pp. 69-78.
- 矢野真・吉津晶子 (2012), 保育者養成校における子どもと高齢者をつなぐ造形活動, 第3回日本世代間交流学会 全国大会 要旨集, pp. 41-42.
- 矢野真・田爪宏二・吉津晶子 (2013), 保育者養成における子どもと高齢者をつなぐ造形活動 —保育者を目指す学生の学びを中心に, 日本世代間交流学会誌, Vol. 3, pp. 67-76.
- 矢野真・吉津晶子・田爪宏二 (2013), 保育者養成における地域と世代をつなぐ造形活動, 第4回日本世代間交流 学会全国大会要旨集, p. 48.

- 矢野真・田爪宏二・吉津晶子 (2014), 保育者養成における地域と世代をつなぐ造形活動 —質問紙調査にみられる学生の学び—, 大学造形美術教育研究, 第12号, pp. 35-41.
- 矢野真・田爪宏二・松井勅尚 (2014), 保育者養成における実践的教材としての「木育」 —学生の「学び」の深まりを中心に—, 京都女子大学発達教育学部紀要 第10号, pp. 113-119.
- 田爪宏二・吉津晶子・溝邊和成・矢野真 (2014), 保育者志望学生における世代間交流への支援の特徴 —クロス・トレーニング・プログラムの実践から—, 日本発達心理学会第25回大会発表論文集, p. 485.

## 付記

本研究は、平成24～26年度科学研究費 基盤(C) 研究課題 (課題番号: 24531033) 「保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の開発」(研究代表者: 矢野真, 分担者: 田爪宏二) の補助を受けて行われたものである。